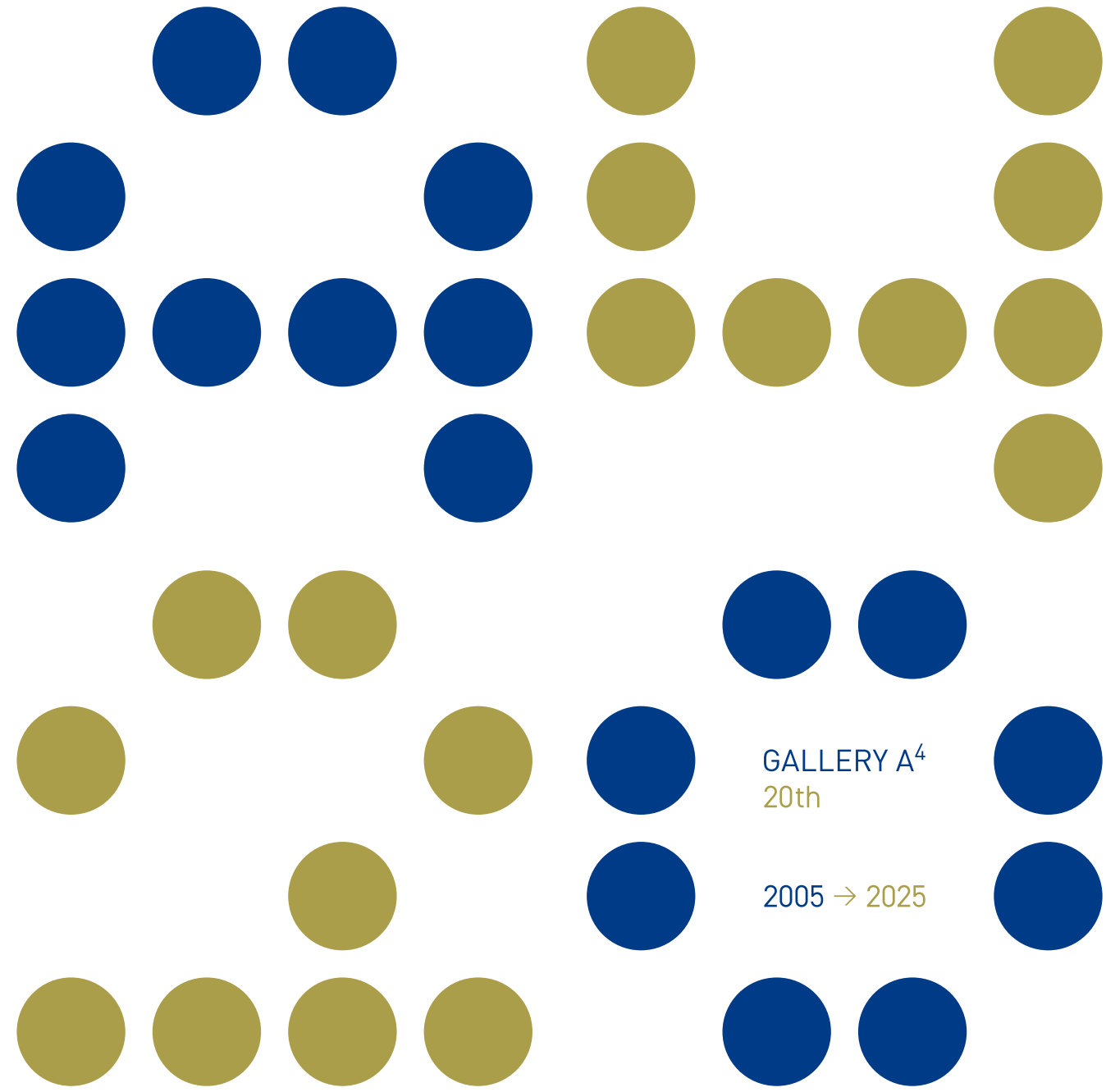




GALLERY A⁴ 20th 2005 → 2025

2025



GALLERY A⁴ 設立20周年 心からの感謝を込めて

いま20年の時が流れ、私たちはここに立っています。

建築は、人々の切なる願いと時の流れが共鳴して現れ、形として残るものも、記憶となって消えてゆくものもあります。私たちを取り巻く環境は、刻々と変化しつつあり、この先も、流れはもっと早くなり、あっという間にいまが過去のことになるでしょう。

建築は、柔らかい雲の織物のように、ふんわりと人々の生活や要望を包む、柔らかく、自由で、生きたもの……私たちギャラリー エー クワッドはそうイメージして、その中に生きる人の暮らしに関心を寄せてきました。

エー クワッドは、時流に動く都市の大きな河に浮かび、社会を見つめる雲の家。人が集まれば縁側を広げ、雨が降れば軒を伸ばし、晴れたら窓をあける。周囲には、どこまでも続く創造の庭。夜になればランプを灯し、時には月を想う。そんな場所でありたいと願ってきました。願いは叶い、たくさんの方々が、やって来ては輝きを放ち、種を植え、果実を落とし、一緒に育ててくれました。^{たても の や}建物屋の看板は出していますが、建築やデザインそのものを知らせるだけではなく、そこから生まれる空間にたまった記憶や、思索の時間を大切にしてきました。

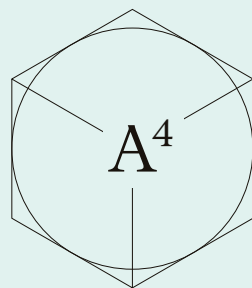
AIの発展で、人間の存在価値を問われるなか、早く簡単に分かる答えよりも、遠まわりすることによる偶然の発見や、時をためて得られる豊かさを尊く感じます。多くの方々が来てくださったこの場所が、これからも順繰り、お裾分けのように繋がって、心と知恵をほぐす、また来たくなる場所であり続けることを願います。

岡部三知代

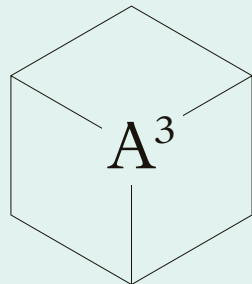
ギャラリー エー クワッド館長

GALLERY A⁴

ギャラリー エー クワッド



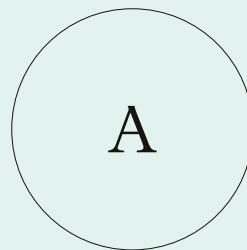
||



Architecture

建築

×



Amusement

楽しみ・娯楽

Atmosphere

空気・雰囲気

建築・愉しむ

2005年9月、GALLERY A⁴ は、「建築・愉しむ」をコンセプトとするギャラリーとして産声を上げました。

ちょっと不思議な名前は、左頁にあるような考えのもとに生まれています。すなわち、A³ は建築そのもの。それに、「愉しみ・娯楽」「空気・雰囲気」など、さまざまな A (=何か) が掛け合わされて、A⁴ となる。A⁴ には読み方がありませんが、「4 つ」を意味する「quad」は「中庭」も意味し、この場所にぴったりなのでは……と名づけました。つまり、これは私たちの造語なのです。

このように読みにくいギャラリー名ではありますが、運営方針はとてもシンプルです。それは、建築文化をニュートラルな立場から発信していくこと。そのことを通して、いまよりも豊かで希望のある、この先の社会の姿を探ること。

建築は誰の暮らしにも関わりのあるものです。誰にでも「暮らし」があるように、誰の暮らしにも「建築」は寄り添っている。そんな建築は、いったい誰が何を考えて、どのようにつくられるのか——その価値観や美意識に触れてみると、「暮らしを形づくる、あらゆる美しいもの」の成り立ちにも目が開かされていく。暮らしに哲学のある人の生きざまや、この社会の課題についても、考え、思いを深め、語り合いたくなる。私たちは、そんなふうな、きっかけを差し出す「場」、気楽な立ち話ができる「庭」でありたいと願ってきました。

私たちの展覧会には、決してわかりやすい「答え」は掲げられていません。簡単に答えの出ないことこそ、ゆっくり、じっくり、皆さまと一緒に考え続けていきたいのです。知的な「愉しみ」を忘れずに、心をちゃんと動かして。

この小さな「場」の活動が認められ、設立20年の間に、「メセナアワード 2014 メセナ大賞」「日本建築学会賞（業績）」「文部科学大臣表彰」などを受けることもできました。携わってくださるすべての皆さまに感謝を伝えたく、これまでの歩みを振り返って編んだのが、この一冊です。どうかこれからも、温かく見守り、お支えいただければ幸いです。

ギャラリー エー クワッドの展覧会企画は、美術や建築に造詣の深い
アドバイザーに意見をいただき、じっくりと練り上げて形になっていきます。
そんなアドバイザーの一人が、静岡県立美術館館長の木下直之さん。
20年にわたり、独自の視座から知恵を授けてくださってきた木下さんは、
エー クワッドと歩んだ道のりを、どのように見ていらっしゃるのでしょうか。
岡部三知代館長とともに、たっぷりと語らっていただきました。

「建築」を、もっと柔らかな言葉に開いていく。

木下 今日のために、エー クワッドの年表を穴のあくほど
眺めて来ました。これは陳腐なたとえかもしれないですが、
人間で言ったら、エー クワッドは二十歳を迎えたんじゃないかと。
2005年に誕生してヨチヨチ歩きを始め、2013年
から20年くらいが成長期。コロナ禍のあたりで大きな転換
期を迎え、そしていまが成人。それぞれの転換期については、
のちほどお話しするとして、まずは、誕生以前のお話を伺っ
てもよいでしょうか。

岡部 ご存じのようにエー クワッドは、竹中工務店が設立
した公益財団法人の一つです。はじめは1961年設立の竹中
育英会。次に、84年の竹中大工道具館。それに続く財団とし
て、竹中統一現名誉会長が設立したのがエー クワッドです。

そもそも、2004年に竹中工務店が銀座からこちら東陽町
に移転する際に、「地域に開かれたギャラリースペースを新社
屋につくろう」という話になったんです。その人材を社内
から公募し、設計部出身だった私も応募しました。ふたを開
けてみたら、「あなた一人に決まりました」と言われて（笑）。
館長は、設計部のプリンシパルアーキテクトだった川北英さ
ん。その二人と、川北さんが声を掛けた社内の有志が集まっ
て、「じゃあ名前をどうする？」から始まったんです。

木下 なるほど、岡部さんは志願したんですね。

岡部 気軽に志願してしまったんですよ（笑）。最初の議論
は、「私たちは何を目的に、誰を相手に、何をしていけばい
いのか。どういうことが社会貢献になっていくのか」という
こと。「建築文化は外せない」という話になったのですが、
川北が、こんなふうに私たちに語ったんです。

「竹中の、静謐で、デザイン重視であり、安定していて、
古いものをきちんと継承するというフィロソフィーに対して、
エー クワッドはもっとアグレッシブにいこうよ。もっと現代
アートのように激しいこう、もっと広くアンテナを張って
いこうよ。それによって、建築文化に貢献することが新しく
見つかるんじゃないか。建築ファンをもっと増やそうよ」

とまあ、そんなふうにリーダーシップをとったんです。

木下 私は80年に兵庫県立近代美術館に就職したのですが、
それから間もなくして、同じ神戸に竹中大工道具館ができた
ときには、本当にびっくりしました。当時は小さなスペース
に、ぎっしり大工道具が展示されていて……建築会社とし
て、「建築の成果」を見せるのではなく、建築文化を生み出
していく「道具」を見せる。この発想はすごいと、いまだに
その驚きは蘇ります。

それから20年後にエー クワッドをお手伝いすることにな
るわけですが、そのときに、「建築業界だけで通用する言葉
からいかに脱するか」を考えました。これは別に建築業界に
限らず、美術業界もそうだし、あらゆる業界が、その業界の

人間について考え続ける場所

20周年記念対談

岡部三知代×木下直之



中だけで通用する言葉で語り合っている。エー クウッドにはぜひ、「^{けんちく}建築」という言葉を、もっと柔らかく一般の人に伝わるような「^{たてもの}建物」に変えてほしい。そういう捉え方で展示を組んでほしいと、期待したのです。

後進だからこそ見いだした、「木造モダニズム」。

木下 しかし、いま振り返ると、最初の頃は企画の枠組みが先にかっちりあって、それに展示会を当てはめていく感じがありましたよね。そんな、ヨチヨチ歩き頃の話を伺いたいのですが。

岡部 「建築文化とは何か」と考えたときに、まずは「建築写真」をアートとして確立することだと。もう一つは、モノづくりの匠の精神を示すものとして、20年先輩である竹中大工道具館のリソースを展開し、この場を活性化していただきたい。それと、館長の「アグレッシブ」が表現された現代アート、しかもインスタレーション、空間的なものを入れよう。それがほぼ、大きな三つの柱でした。

木下 竹中大工道具館の企画では、職人が技を見せるデモンストレーションが何度かあり、あれがこの地域にギャラリーの存在が知られるととてもいい機会になっていたと思います。

最初の10年間に、集中的に「木造モダニズム」の展示会が開かれていますね。建築会社がつくった先輩にあたるギャラリーがいくつかありますが、それらとは異なる展示会を模索した中で見えてきたのが、この木造モダニズムの世界なのでしょうか。

岡部 そうですね。設立前のリサーチで参考にさせていただいたギャラリーでは、最先端の建築家のデザインを紹介していました。後進の私たちが同じことをやっても意味がないの

で、いまの建築家ではなく、モダニズム以降の建築家を掘り起こしていこうと。坂倉準三や前川國男など、1920年代から1960年代のあたりですね。

木下 必然的に、大建築ではないわけですよね。

岡部 その通りです。公共建築やランドスケープ的なものは展示会として成立させやすいのですけど、住まいはそれが難しい。でも、そのニッチのところをやりたかったんです。

木下 2009年には『『聴竹居』と藤井厚二展』。

岡部 藤井厚二という建築家が、竹中工務店設計部の黎明期を支えたという由縁もありますし、藤井の成し遂げた仕事は、当時はほとんど忘れ去られていました。私たちが発掘して取り上げたところに、この展示会の意義と価値がありましたね。

木下 それから、初期の企画で私が印象に残っているのは、2年目の「明治生命館 1934-2006」（2006年）です。サブタイトルが「保存と再生」。実際に竹中工務店として、過去に建てた近代建築の保存・再生の仕事をする時期だったのではないかと思うのです。保存よりも再生、あるいは再生させることで保存するということを教えられました。

何が印象的だったかというと、ポスターですね。明治生命館は、お濠端にある昭和を代表するオフィスビルです。堂々たる石造建築に見えるのだけれど、まあハリボテというか、鉄骨鉄筋コンクリート造に石を張っている。ポスター中央にコリント式の柱が立っているのですが、あれは鉄骨と石膏で試した仮柱、いわばフェイクでしょう。それを堂々とポスターにして（笑）。「建築ってなんだろう」ということをストレートに突き付けてきて、本当に印象に残ったのです。その後の「三菱一号館」展（2009年）や「西本願寺『伝道院』と伊東忠太」展（2012年）など、竹中工務店による近代建築の保存・再生の仕事を紹介する重要なシリーズだったと思います。



1「保存と再生 明治生命館 1934-2006」 2「人・建築・都市を記録する ―レンズ付フィルムによる写真展 100人の東京駅」

3「削る 一飽の世界」デモンストレーション（2007年） 4「アルビニスト 野口健からのメッセージ展 ―未来の子どもたちのために」 5『『聴竹居』と藤井厚二展』



1「宇宙からの伝言 一ものづくりと冒険の心ー 的川泰宣展」ワークショップ 2「森山開次展 ハコ・ヒト・ハコー踊り | 空間 | 映像」ダンスパフォーマンス
3・4「トーヴェ・ヤンソンの夏の家 ムーミン物語とクルーヴ鳥の暮らし」 5・6「三里塚教会物語と吉村順三展 ー時代を越えて生き続ける小さな木造教会」

企画に広がりを持たせ、社会の関心事を拾っていく。

木下 2006年には、「レンズ付フィルムによる100人の写真展」シリーズがスタートしました。これはもともと、阪神淡路大震災の直後、神戸の街を撮るという企画に私が関わっていたのですが、それを東京でやろうという話になったわけです。まずどこを撮ろうかと考えたとき、復元工事が始まる前の東京駅の姿に注目しました。戦争と戦後の復興の記憶に向き合おうと。参加者がギャラリーに実際に関わることができるという意味では、有意義な企画だったと思います。

それから「野口健からのメッセージ」(2007年)。これもまだ3年目の企画でしたが、建築とはかなり離れていますよね。**岡部** 建築から少しでも広がりを持たせて、社会の関心事に結びつく企画ができたかと、じつは当初から考えてはいたんですね。先ほど先生が触れられた「保存と再生」というテーマも、社会の関心事を拾っていると思うんです。昭和初期の近代建築遺産が、建て替え時期を迎える中で、どんどん壊されて失われていく。そこで私たちは何もせずにいるのか、もっと残すことはできないのか……と考えたことが、明治生命館や三菱一号館の企画に結びついています。

また、環境問題というのは80年代から社会の大きな関心事になっていましたが、野口健さんはエベレストのごみを拾って、見える形、非常にわかりやすい形で環境問題を訴えた人です。それを伝えたいと考え、「ごみをそのまま展示しよう」と、あのインパクトのある展示となったのです。

木下 ごみのディスプレイはギャラリーでやったのですか。**岡部** ええ、酸素ボンベとごみをそのまま展示しました。展覧会は「どうやって見せるか問題」が大きいですが、私は設計部出身なので、会場設計は常に自前でやってきました。木

造モダニズム展も必ず原寸の模型をつくるなど、展示空間には、ちょっとこだわってきた自負があります。

等身大の自分として見えてきたテーマとは。

木下 そろそろ、次の「成長期」の話題に入りましょうか。2013年の「トーヴェ・ヤンソンの夏の家」は、一つの転換期だったと思うんです。ある意味、圧倒された。何に圧倒されたかというと、トーヴェの生き方ももちろんだけど、この企画をエー クワッドでやったということに、本当に驚いた。しかも岡部さんは、トーヴェが過ごした孤島にまで行って取材していますよね。いったい何に惹かれたんですか。**岡部** 女性の生き方に関心があったのだと思います。当時、「女性活躍」が謳われてはいるものの、実際のロールモデルがないわけです。かつて活躍した女性たちを調べていくと、北欧の女性活躍の先鋭たる事例に興味を抱くようになり、トーヴェ・ヤンソンはそうした中から出てきたんですね。

自分で本気でやりたいと思える内容に初めて出会ったのが、トーヴェ・ヤンソンでした。それまでは、館長や先輩が起案した企画を、必死になって実現する役割が多かったですね。**木下** それ以前に岡部さんが発案した企画は？

岡部 「宇宙からの伝言 的川泰宣展」(2009年)、「瀬底恒が結んだ世界と日本」(2011年)などです。子育てをしながら働く女性である、等身大の自分として、「環境問題」「子どもの生育環境」「女性活躍」、その三つが最大の興味で、そこを掘り上げたかったんです。

でも、企画に「建築ワード」を入れないと、組織として納得が得られないですよ。それでトーヴェ・ヤンソンの場合は「夏の家」を。大きな発見があり、面白かったですね。

木下 それがやがて、この12月に催す「フィンランド スピリット サウナ」展につながっていくという。こんな小さな「夏の家」にさえ、サウナがあるんですね。

岡部 そう、それだけサウナはフィンランドの人たちの暮らしに不可欠なんです。

木下 同じ2013年の「三里塚教会物語と吉村順三展」も、やはり転換期の一つだと思います。若き日の吉村順三の作品、小さな木造教会を世に初めて紹介したわけですが、それを守り抜いてきた信徒たちの思いにも触れている。何よりも、その教会を自宅の敷地内に建て、やがて成田空港建設が決まると反対闘争の先頭に立った戸村一作（その名前はイサクから）という人間の生き方にまで目が届いている。建築家中心に紹介しがちなほかの建築ギャラリーよりも視野が広く、木造モダニズムシリーズの明らかな実りでした。

岡部 そうですね。この翌年はメセナ大賞を受賞することができたのですが、評価されたのは、やっぱり建築に対する独特な切り口だったと思います。三里塚教会は特に、先生が最初に提言してくださった、「建築をほかの言葉に置き換える、ほかの見方をしていく」という視点が生きていて、新鮮だったのかもしれません。それは設立当初に「広くアンテナを張ろう」と鼓舞されたことの果実が、次々と実り始めたなあ振り返るところはありますね。

木下 女性に目を向けた企画は、その後も続々と催されます。

岡部 2014年は高野悦子を取り上げ、17年はヴァージニア・リー・パートンを企画にしました。彼女は、絵本作品の『ちいさいうち』で環境問題を訴えかけています。

この展覧会は全国各地のみならず、アメリカまで巡回することになりました。青山のスパイラルガーデンで2週間催したところ、1日あたりの入場者数がエー クワッドの10倍ほ

どになって。私たちの理念として、入場者数はあまり気にせずのびのびと企画を立てていますが、自分たちのコンテンツにそれだけの魅力がある、ほかの場所でももっと活用できるんじゃないかという、ちょっとした自信にもなりました。

フィンランドに学ぶ、暮らしの豊かさ。

木下 岡部さんがフィンランドへの関心をずっと重ねていく中で、「生まれてはじめてもらうプレゼント フィンランドのベビーパッケージ」(2018年)という企画が、アドヴァイザーの議論の場へ上がってきたとき、私はすぐに飛びつきました。フィンランドでは子どもが生まれたときに、国から「ベビーパッケージ」という贈り物が届くなんてびっくり。この制度を見つけてきたこともすごいけれど、それを展覧会にしようだなって。建築とはほぼ関係ないですよ。

岡部 関係ないですけど、そこで工夫するんですね(笑)。やりたい、というところから始まるから、辻褄を合わせるわけではありませんが、アートの切り口を入れて形にしてみました。その前に、「アイノ・アールト」(2016年)、「マリメッコ展」(2017年)を催しましたが、どちらもデザインの背後に自立した女性の活躍があります。そういった、フィンランドの女性が持っている強さに惹かれていく中で、ベビーパッケージという、「社会が生まれてくる赤ちゃんを歓迎すること」が伝わる仕組みに、非常に感動したんです。

フィンランドは、小規模な国ながらも、豊かな生き方ができるように思えたんですね。休暇もたっぷりあり、生き生きと活躍している女性も多いし、大学への進学率も高い。それがどうして実現できるのだろう？ 日本のこれからの社会を考える中で、教えてもらえることがあると思うんです。



1「ヴァージニア・リー・パートンのちいさいうち 一時代を超えて生き続けるメッセージ」 2「生まれてはじめてもらうプレゼント フィンランドのベビーパッケージ」
3「木下直之全集 一近くても遠い場所へ」(2018年) 4「藤元 明『陸の海ごみ』」(2019年) 5「アイノとアルヴァ 二人のアールト 建築・デザイン・生活革命」(2019年)

コロナ禍以降のダイバーシティのまなざし。

木下 近年の企画は、フィンランドに見られるような「暮らし」にフォーカスされてきた感じがします。暮らしを考えていくと、必然的に、「環境」や「社会の仕組み」が企画になっていきますね。コロナ禍以降は、堰を切ったように先鋭的な展覧会を展開している。私もけしかけたひとりですが、2021年には、「社会のダイバーシティを考える」として、義足を扱っています（30頁）。

岡部 コロナ禍というのは、社会全体が立ち止まる大きな機会でした。私たちの興味と視座はもともと、その場限りの面白さなどではなく、時間をかけて変わっていくもの、つくられていく現象のほうにありましたが、それが社会の視点と合致していったのが2020年くらいのように思うんですね。

そこで「暮らし」という視点で、「発酵展」（2022年・28

頁）では社会の循環や自然の循環を掘り下げたのですが、一人ひとりの生き方に関わる「ダイバーシティ」という視点は、もっともっと大きい、未来をつくる大きな循環なので。本当にやってよかったと感じています。

木下 振り返ってみると、「エー クワッドらしさ」というのは、どのように出来上がっていったのでしょうか。最初はやっぱり、「建築」がコアなところにあって揺るがないのだけれど、それからどんどんと広がってきた。しかし、常に建築を意識することで、原点に回帰していくような展覧会が続いた感じがします。「吉村順三の眼」（2023年・19頁）なんて、三里塚教会から、ここまでつながるとは思わなかった。

岡部 エー クワッド全体の「らしさ」を考えたときに、ここがどういう場なのかを、突き詰めて考えなくちゃいけないと思います。児童文学者の松岡享子さん（23頁）は、図書館に関わる人を「本は良いものだと思じる人たち」と書いていらっしゃるかもしれませんが、私たちは建築、あるいは「場を信じる人たち」なんですね。この場がいつも、何か社会を深く面白く掘り下げることを語りかけ、来場者と私たちがともに考えることができる。社会との接点を失わずに、建築から離れそうで離れない領域を、ずっとキープしていければいいんだろうなあと、だんだん確信的になってきた気がします。

木下 創設10周年の記念誌に、私がこんなことを書いているんです。

「10年前の開設に携わったひとたちの思いや期待をはるかに超えて、ギャラリーは大きく育った。これからもまだ成長をつづけるに違いない。たとえ身体（展示スペース）は小さくたって、来場者に向けて語りかける夢や世界が大きいのだ。多彩な企画を振り返ると、進路は、いつのまにかギャラリーエー クワッドが自らの意志で決めているような気がする」

最後が少し余計だったかもしれないけど（笑）、「語りかける夢や世界が大きい」というのは、特に子どもに対して。「月で暮らそう」（2022年・25頁）なんて、まさにそうです。

その後の15周年誌には、「建築会社のギャラリーだから建築の展覧会に終始し、自足してきたならば、私は15年にわたってお付き合いをしてこなかっただろう」と書いている。それはもう本当にそうで、5年が経ったいまでも、そういう思いでありまして。エー クワッドって、「人間について考え続ける場所」なんだと思っています。

見えていなかった切実な問題に向き合っていく。

木下 最後の話題は「これからどうする？」です。建築を起点にするだけでも、やるべきことは無限にありそうなんですね。岡部さんとして、今後やりたいことをお聞かせください。

岡部 世の中から見えなくなっているけれども大事なことを拘っていきたいと考えています。社会構造がどんどん変わる中で、子どもの生育環境も変わりすぎている。よい点もある一方で、ゆっくりゆっくり時間をかけて育ててきた温かいものが、丸ごととはぎ取られてしまうようにも感じます。たとえば、松岡享子さんが提唱したおはなしの時間や、親子関係そのもの。昔と同じところには戻れないけれど、ではどうしたらいいのか。そんなテーマを、子どもだけではなく、建築や女性活躍の分野にも設けて考え続けていきたいですね。

木下 最近思うのは、10年前には見えていなかった問題がたくさんある。たとえば、芸術表現の中でトランスジェンダーがどういうふうに反映されているか、といったことです。それから、人の暮らしを考えたときに、その終わり、つまり「死」ですね。「マギーズセンター」の展覧会（2015年、

木下直之
きのした・なおゆき

静岡県立美術館館長。1954年、静岡県浜松市生まれ。東京大学総合研究博物館、東京大学大学院教授（文化資源学）などを経て、2017年より現職。15年、春の紫綬褒章。『美術という見世物』（平凡社、サントリー学芸賞）、『わたしの城下町』（筑摩書房、芸術選奨文部科学大臣賞）、『増補 股間若衆』（筑摩書房）など、著書多数。



20年）では、がんと生きる人たちが自分らしくいられる居場所づくりをテーマとしましたが、やがて終えていく人生の問題も、今後の企画にできそうな気がします。

岡部 本当にそうですね。ダイバーシティのテーマは、身体障害だけが課題のように捉えられがちですが、じつはもっと掘り下げられるように考えています。老いることで、それまで普通に送っていた暮らしから離れていって、本人も支える人たちも、自分の人生が楽しめなくなってしまうことがあります。新しい介護の姿や、高齢者施設の形。「楽しく老いる」という発想は、間違いなく誰もが望むことですから、今後のテーマとしてアンテナを張って追求していきたいですね。

木下 そう、エー クワッドのキャッチコピーは「建築・愉しむ」ですからね。「人間について考え続ける場所」として、いま切実な問題を、愉しみながら考える展覧会に仕立てていってほしいなと願っています。



岡部三知代
おかべ・みちよ

ギャラリー エー クワッド館長。1989年、竹中工務店入社、設計部に所属。2004年、エー クワッドの社内公募に応募。主任学芸員として全展覧会に携わる。23年より現職。「アイノとアルヴァ二人のアルト」は、21年に西洋美術振興財団 文化振興賞受賞。24年に建築学会賞（業績）、25年に文部科学大臣表彰を受賞。

2021-2025 24の展覧会より

地域に開かれた親しみのあるギャラリーを目指し、
「自分たちが建築文化に貢献できることは何か」を考え続けた20年間。
目まぐるしく変わりゆく時代の中、社会のさまざまな課題に向き合ううちに、
展覧会で取り上げる企画は、自ずと広がりを見せてきました。
ここでは、この5年間の展覧会を、6つのテーマに分けてご紹介します。

- 1つ目のテーマは、ギャラリーの原点そのものである「建築は面白い」。
- 2つ目は、信念を持って人生を拓き、社会に貢献した先人から、
いまを生きるヒントをもらう「その生きざまに学ぶ」。
- 3つ目の「未来を歩むひとたちへ」は、次世代に手渡す経験や知恵を探り、
- 4つ目の「自然とつながって暮らす」は、自然環境について思いを深めるために。
- 5つ目の「誰もが自分らしく生きるために」は、ダイバーシティを手掛かりに、
一人ひとりの違いを認め合うことで開ける世界を考えました。
- 6つ目の「アートとデザインをひもとけば」は、ギャラリーという「場」を生かし、
建築や暮らしの領域に触れる作品をダイナミックに展示しています。

どなたもこの場を楽しんで、記憶として残る「何か」を持ち帰っていただけたら。
そう願いながら、私たちはこれからも真摯に企画を追求していきます。

1 | 建築は面白い

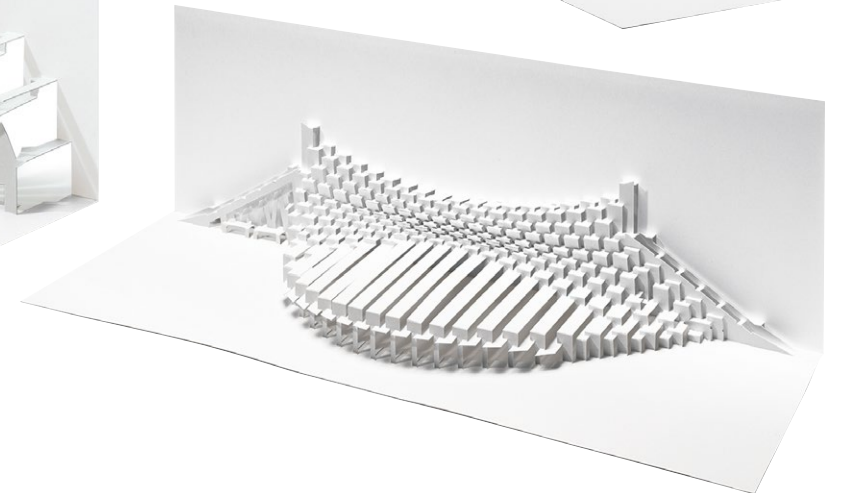
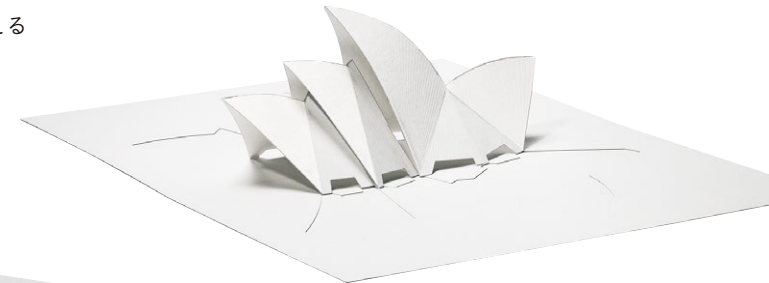
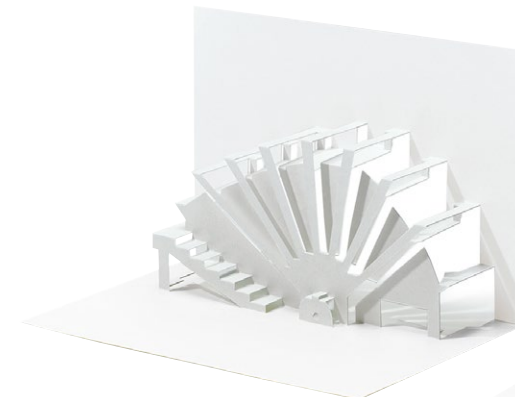


オリガミ・アーキテクチャー 一枚の紙から世界の近現代建築を折る [会期] 2021年4月9日 - 6月3日

建築家の茶谷正洋が1981年に考案した、折り紙建築。一枚の紙に
切り込みを入れてつくられ、二つ折りの状態から開くと、立体の建築
が立ち上がる。小さくとも特徴を捉えたその姿は、見る人の心に、建築
への興味や愛情を呼び覚ますことだろう。本展は第16回 DOCOMOMO
国際会議の協力のもと、国内外の近現代建築80点を再現。中には解
体の危機に瀕している名建築もあるが、それらの建築が社会で果たし
てきた役割や、保存活用などの課題について、考えを深めてもらえる
きっかけとなれば——そんな願いが込められた展覧会である。



壁面展示は「複数のモダンムーブメント（近代建築運動）年表」。世
界を10の地域に分け、各地域50件ずつ、計500件の建築を選んで
図にした。



二つ折りのカードを90度や180度に
開くと建築が現れる。右上から時計回
りに、シドニー・オペラハウス（1973
年）、国立代々木競技場（1964年）、都
城市民会館（1966年）。絶妙な省略に
より、その建築の特徴を浮かび上がら
せている。



竹中大工道具館 企画展

天平の匠に挑む

古代の知恵 VS 現代の技術

[会期] 2021年8月17日 - 10月8日

1200余年前の天平時代に建てられた国宝・唐招提寺金堂は、江戸（元禄）時代と明治時代に大規模な修理が施されている。1998年から2009年に行われた平成の大修理では、当初の姿や、各時代の修理改造の履歴を解明したうえで、最新技術を応用して課題解決が図られた。本展は、古代の匠の技を解き明かした、現代の技術者の姿に注目。千年以上生き永らえてきた建築は、どのようにつくられ、継承されたのか。建築技術・彩色復原・木材などに焦点を当て、「古代の知恵」と「現代の技術」を対比的に紹介した。



金堂は、創建当時の構造材が多く残されている。平成修理では、内倒れを防ぐために全解体を行い、新たな補強を実施した。



唐招提寺金堂の模型。1963年に、奈良文化財研究所の調査をもとに製作された模型は、当時の創建当初復原案に従って小屋組が「二重梁組」だが、平成修理の解体調査で「叉首（さす）組」と判明。この模型に反映された。



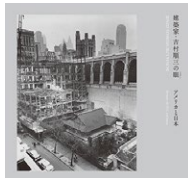
上・組物の原寸模型（予備）。地震時の変形などを調べる実験用。
下・当初材と思われる、ヒノキの大斗（だいと）。（この2点の所蔵：唐招提寺）



1954年、ニューヨーク近代美術館の中庭に展示した、書院造の日本建築「松風荘」。大きな話題を呼び、のちのアメリカでの仕事につながった。

建築家・吉村順三の眼 アメリカと日本

[会期] 2023年12月22日 - 2024年3月28日



モダニズムと日本の伝統を融合させた建築家で、住宅の名手として知られる吉村順三。1940年、若き吉村は師であるアントニン・レーモンドに呼ばれ、アメリカ・ニューホープのレーモンドファームで14カ月を過ごす。吉村たち事務所の見習いは、農場を手伝いながら設計に向き合う暮らしの中で、レーモンドの建築観と自然観を学んだのだった。本展では、戦前に吉村が見た「アメリカの対等で自由なモダンライフ」と、戦後に吉村がアメリカに伝えた「日本の自然観とミニマリズム」の、両方に通底する眼差しを追った。



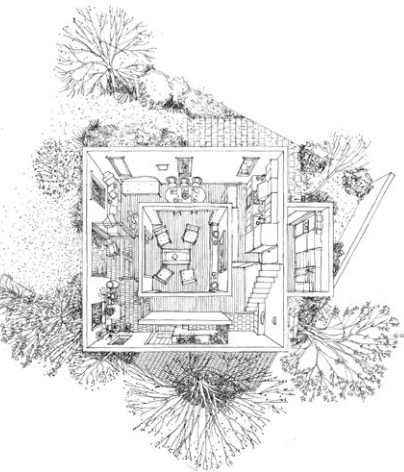
吉村のカメラで撮影された、レーモンド・ファームでのスナップ写真。中央に写る吉村は32歳くらい。渡米中に、訪れた先々に残るコロニアル建築やニューヨークの風景なども自身で撮影している。（所蔵：吉村設計事務所）



1955年に、ピアニスト園田高弘とその妻・春子のために設計した小住宅。かつてはこの空間にグランドピアノが2台置かれていた。



「中心のある家」の2階。腰の高さから上はすべて出窓になっており、開放感がある。窓辺には、お気に入りの小物などが並ぶ。



阿部による1階部分のスケッチ。
(出典：阿部勤 著、藤塚光政 写真『中心のある家 建築家・阿部勤自邸の50年』学芸出版社)



建築家・阿部勤のいえ展 暮らしを愉しむデザイン

[会期] 2025年4月4日 - 6月26日

建築家の阿部勤は、1974年、38歳のときに、家族3人で住まう自邸「中心のある家」を建てた。「回」の字に似た空間構成のこの家は、「守られているような安心感」と「開放感」を併せ持ち、あちこちに心地よい居場所がある。のちに独居となると、阿部はオープンなペニンシュラ（半島型）キッチン进行け、客に手料理を振る舞うなどして、晩年まで自分らしい暮らしを愉しんだ。本展は、そんな自邸に宿る「暮らしのデザイン」のほか、阿部が設計した数々の住宅の空間構成や、タイでの学校建設の仕事などを紹介した。



1階の「中心の空間」は、天井高が2.92m。テラス越しに庭の緑が望める。遊びに来た客は、めいめいに居場所を見つけてくつろいだ。

2 | その生きざまに学ぶ



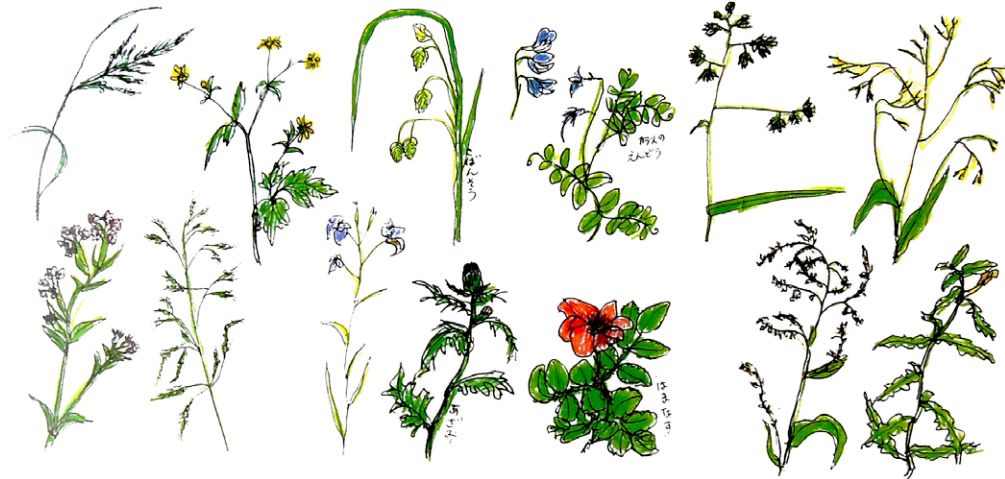
いわさきちひろと 奥村まこと・生活と仕事

[会期] 2022年6月3日 - 9月8日

画家で絵本作家のいわさきちひろと、吉村順三に師事した建築家の奥村まこと。二人の女性は青春時代に戦争を体験し、やがて母となると、仕事と子育てのどちらも犠牲にすることなく、自らの道を拓いた。二人は「働く母の会」を通して知り合って意気投合し、ちひろはまことに黒姫山荘の設計を依頼する。本展は、それぞれが仕事と生活に見いだした喜びや、よりよい未来を願って社会に働きかけた姿を細やかに伝えた。結婚や子育てを人生の糧として、真に輝いた彼女たち。その生きざまから、いまを生きる私たちは何を学べるだろうか。



上・いわさきちひろ。
1971年、愛犬チロと一緒に。(所蔵：ちひろ美術館) 下・奥村まこと。1956年、友人の家にて。(個人蔵)



まことによる「雑草スケッチ」。草花に詳しい友人たちとスケッチを通して交流し、雑草を料理に生かすことも。(個人蔵)



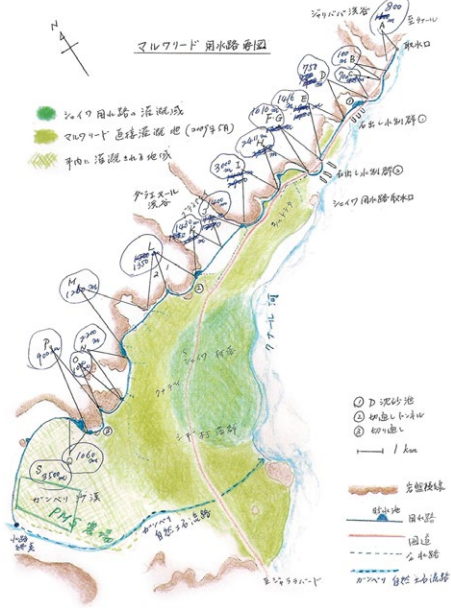
黒姫山荘。まことは家具のデザインも手掛け、竣工後もたびたび山荘を訪ねては、家族ぐるみで親交を深めた。(所蔵：ちひろ美術館)



百の診療所よりも一本の用水路を 中村哲の挑戦

【会期】2023年4月7日－6月22日

医師としてパキスタンやアフガニスタンで活動した中村哲は、2000年の大干ばつ以降、病気の根源である水不足や、農地の枯渇に目を向け、「緑の大地計画」を立てた。「百の診療所よりも一本の用水路」をスローガンに、16年以上の歳月をかけて引いた用水路によって、23800haが緑の農地になり、70万人以上の暮らしを支えている。「自然に生かされる人間がこの大地に生きるものとしての分限をどのように知るのか」。そんな中村の問いかけは、自然との関わり方にこそ、平和を築くヒントがあると教えてくれる。



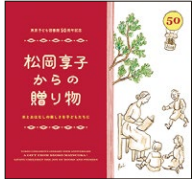
「緑の大地計画」の灌漑用水事業の第一弾、マルワリード用水路を中村がスケッチしたもの。農地を潤す水への希望を込めて、マルワリード＝真珠と名づけられた。



2005年、マルワリード用水路の通水を喜ぶ、中村と子どもたち。用水路の周辺には、モスクや学校も建設された。



東日本大震災のあとの陸前高田市で、子どもたちに絵本を読んで聞かせる松岡。地元の小学校を定期的に訪問しておはなしを語り、児童一人ひとりに本を贈呈したほか、子どもと本にまつわる活動に向けて、物心さまざまな支援を続けた。



東京子ども図書館50周年記念 本とおはなしの楽しさを子どもたちに 松岡享子からの贈り物

【会期】2024年11月29日－2025年3月13日

翻訳家や児童文学者として活躍した松岡享子が「わたしのまんまなかにある」と語ったのが、東京子ども図書館の仕事だった。この私立図書館は、1974年に、松岡の「松の実文庫」ほか、都内4カ所の家庭文庫の主宰者らが設立。職員と一緒に本を読んだり、紹介したり、「おはなし」を語って聞かせたりと、子どもたちが自然と本に親しむ土壌づくりをしてきた。ユーモアと知性の人、松岡が生涯をかけてまいた希望の種は、いまの社会に何をもたらしたのか。関わりがあった多くの人々の証言から、その素顔と功績に迫った。



会場の壁一面に、松岡が手掛けた絵本や児童書、エッセイや評論などの著作を展示した。



『なぞなぞのすきな女の子』の指人形。1972年制作。（所蔵：東京子ども図書館）



松岡の部屋をイメージしてつくったコーナー。実際の本棚に並んでいた書籍や、大事にしていた品々を展示した。

3 | 未来を歩むひとたちへ



住宅課題賞 建築系大学住宅課題優秀作品展

〔会期〕

第21回 2021年10月28日－11月10日

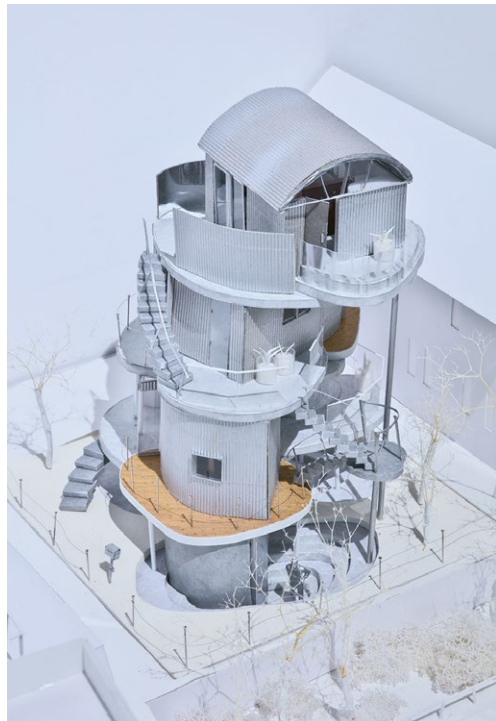
第22回 2022年11月17日－11月30日

第23回 2023年11月16日－11月29日

第24回 2024年10月30日－11月14日

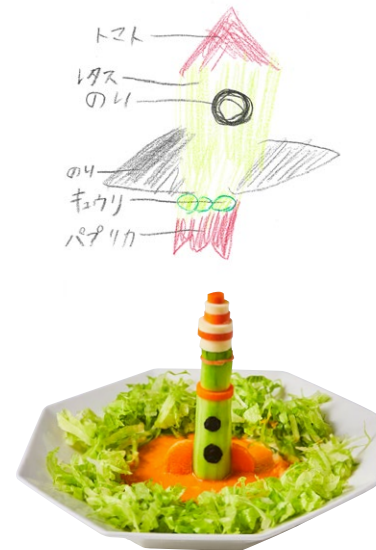
第25回 2025年10月22日－11月6日

首都圏にある建築系大学より、住宅設計課題の優れた作品を1点ずつ募って展示する「住宅課題賞」入選作品展。さらに、建築家などの専門家が審査をし、展示作品の中から8点ほどを選出して顕彰している。一般社団法人東京建築士会が主催し、ギャラリー エー クウッドは企画運営に協力。将来の建築界を担う学生にとっては、他大学と交流を図り、設計の楽しさや建築の社会的意義に目覚める有意義な機会となっている。参加大学は年々増え、2025年は42大学56学科の学生による作品が展示された。



文化学園大学造形学部建築・インテリア学科2年の小林舞さんによる「都市部に建つ戸建て住宅」。第24回の審査員賞。

左・横浜国立大学都市科学部建築学科3年の柳澤美佳さんによる「自然のなかの居住単位」。第21回の優秀賞。右・神奈川大学工学部建築学科建築デザインコース4年の久世文さんによる「30人が暮らし、30人が泊まれる、この先の暮らしの場」。第22回の優秀賞。



月面で食べる特別メニューを子どもたちが考案。向井千秋氏と料理家の栗原心平氏が審査し、選出作の作者と対話ののち、栗原氏が再現した。



コスチューム・アーティストのひびのごづえ氏がデザインした「Moonメット」を、それぞれがアレンジ。会場にも展示された。



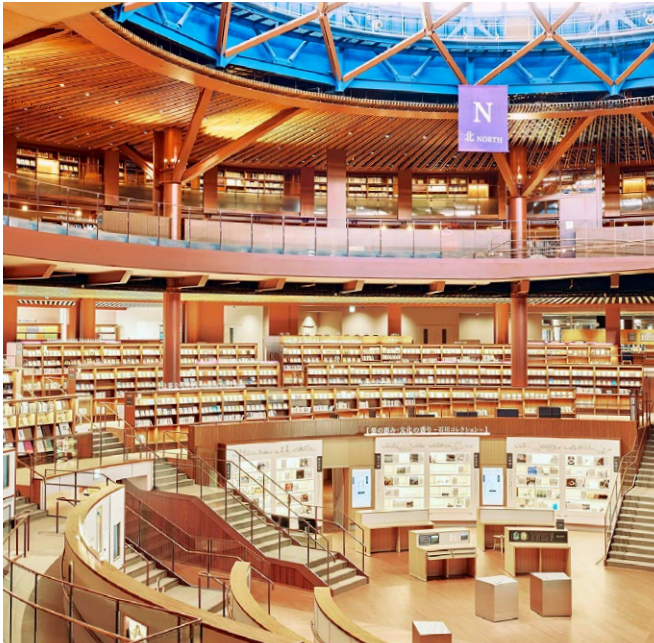
月で暮らそう、月で遊ぼう 重力1/6のワンダーランド展

〔会期〕2022年12月10日－2023年3月31日

α世代の子どもたちにとって、月で暮らす未来はすぐ目の前。元宇宙飛行士の向井千秋氏を全体監修に迎えた本展は、月での衣食住をテーマとしたワークショップやアイデアコンペを催し、参加した子どもたちがつくりあげた「成果」をもとに展覧会を仕立てた。普段のテスト勉強などとは違って、この企画の「答え」は一つではない。みんなで話し合ってアイデアを重ねる中で、「答えは無限大にあるし、変わってもいい」という気づきとなれば——宇宙を題材に、未来を担う子どもたちが楽しみながら思考する場を提供した。



宇宙空間で筋肉や骨が鈍らないように、1日1回は「宇宙体操」で身体を動かす。体操は、ダンサーで振付家の森山開次氏が考案した。



左・2022年開館の石川県立図書館。館内で会話ができ、飲食してもよいエリアも。「開かれた広場のような存在」を目指している。



右・1911年開館のニューヨーク公共図書館。4つの研究図書館と88の地域分館からなる。傑出したアーカイブ、研究者プログラムが特徴。



本のある風景

公共図書館のこれから

[会期] 2023年9月22日－11月9日

民主主義の象徴として地域に開かれ、誰もが無料で書物や資料に触れて、学ぶことのできる公共図書館。いま、そのサービスの範囲は、世界的に広がりつつある。本展は、日本の図書館の種類や機能、歴史に触れるとともに、国内外の特色ある図書館を、サービスや空間の工夫、コミュニティとしてのあり方などの点から詳しく紹介した。これからの都市や地域社会の成長は、創造力や先進的な技術力を持つ人材を有することが決め手となる。未来を担う人材を育むために、図書館ができること。その豊かな可能性を語る展覧会である。



会場の「百冊百景」コーナー。本との出会いのエピソードを一般公募し、100人が推薦した本を、7つのカテゴリーに分けて並べた。

4 | 自然とつながって暮らす



樹の一脚展

人の営みと森の再生

[会期] 2021年2月5日－3月31日

家具に使われる広葉樹は、人が苗から育てるのではなく、種や切り株から自然に育つのが一般的だ。大量生産・大量消費の時代に、森の再生のペースを超えて人が樹を伐るようになり、やがて国内の樹が枯渇してくると、外国材に頼るようになった。本展は、30組の木工家が、埼玉県のと三富地域、神戸市の六甲山の「未活用材」を使ってつくった椅子を展示。一脚の椅子を通して木のことを知り、身の回りの自然環境に目を向けてほしい。循環型の暮らしは、使い手との連携があってこそ——そんなつくり手の切なる願いを伝えた。



ヤマザクラを生かした「ST-Chair」。作者の迎山直樹氏は「地域材の活用は木工家にとって大事な社会的役割」と語る。



ワークショップでは、シェーピングホース（作業台）に跨って樹を削り、1日かけてスツールを制作した。講師は、「さんとめの木をいかす会」のメンバー。

椅子に用いたのは、ヤマザクラ、シデ、コナラなどで、家具には一般的ではない樹種も。来場者は自由に腰掛けて椅子に触れた。



発酵と暮らし

人も海も土も森も…すべてはつながっている

〔会期〕2022年9月16日－11月10日

コロナ禍以降、暮らしと食に目が向く中で、「発酵」が注目を集めた。私たちの暮らしに微生物の働きは欠かせない。発酵菌を生かした畑で有機農業を実践する吉田俊道氏は、「土とお腹はつながっている」と語る。微生物が働く土でつくられた、ミネラルを含んだ野菜を食べていれば、人も免疫力が高まり、病気知らずだと。本展は、そんな食の生産者たちの取り組みを追いながら、健全な自然環境が人の健康をつくることを伝えた。根源的な「食べる」という文化の継承こそが、自然環境一体の「健康」を次世代につないでいく。



しょうゆやみそを昔ながらの製法でつくるとき、微生物の棲家となる木桶。木の表面にある無数の孔に、多種多様な微生物が棲みつく。



映画『いただきます2 ここは、発酵の楽園』（2020年・オオタヴィン監督）より。有機農業に取り組む生産者の姿や、その畑で発酵した土に触れ、野菜を収穫して食べる子どもたちの姿を紹介した。



小豆島の「ヤマロク醤油」の蔵。島の気候と地形を生かしたしょうゆづくりの工程や、微生物が働きやすい蔵の仕組みなども解説した。



オランダ東部の村フメロにある、ピート・アウドルフの自庭。妻アーニャと40年以上にわたり、ここで庭づくりの研究を重ねてきた。



ピート・アウドルフの ナチュラリスティックガーデン いのちがめぐる庭

〔会期〕2024年4月19日－7月11日

1990年代、ガーデン界で新たなムーブメントを起こしたピート・アウドルフ。植物の開花期のみならず、立ち枯れの姿にも生命循環の美しさを見いだす革新的なアイデアと思想が、自然環境への関心の高まりとともに世界中に広がった。彼にとっての「ナチュラリスティック」とは、各地域に自生する植生を、自然のまま生き生きとした姿で生かし、良き植物コミュニティ（多様性）を形成すること。本展は、そんな思想が反映された、世界各地の代表的な7つの庭を中心に、デザインのポイントや、じっくりと時間をかけて見守る維持管理の工夫などを解説した。



都市の空中庭園「ハイライン」。ニューヨークのマンハッタン島に残された貨物鉄道の線路跡を転用し、活気に満ちた遊歩道庭園をつくりあげた。

5 | 誰もが自分らしく生きるために



社会のダイバーシティを考える

立つ、歩く、走る

義足でこえる心の壁

〔会期〕2021年6月11日～8月5日

足を失った人にとって、義足は暮らしを支える大切な道具である。義肢装具士の臼井二美男氏は、熟練した技と一对一の対話を通し、ユーザーの身体にフィットする義足を製作してきた。東京大学の山中俊治研究室は、臼井氏の協力のもと、3Dプリントなどの技術を用いた「美しい義足」プロジェクトを進めている。本展では、そうした義足の製作や歴史を紹介しながら、一人ひとりに真に寄り沿うデザインを見つめた。多様な人々が自分らしく豊かな生き方ができること。社会のダイバーシティを考える一助となることを目指した。



左・走行用の大腿義足。中・デコレーション義足。以上2点は臼井氏が製作。右・山中研究室による、陸上競技用義足「Rami M」。



対話から始まる臼井氏の義足づくり。自身の仕事の意義を、「安心して立ち上がり、歩くことをスタートラインに、夢や希望を抱いて社会生活に挑戦していただくこと」と語る。



臼井氏は1991年に、義足ランナーのための陸上クラブ「スタートライン Tokyo」を創設。義足を使いこなすことが自信につながる。



ワークショップ「点字で自分の名刺をつくろう」のひとつコマ。日本点字図書館のスタッフに教わりながら、自分の名前を点字で書いた。



上・会場では、点字の書き方や、日本点字図書館の仕事なども紹介。下・光島氏と作品「エークウッドからひろがるそよぐ まちの風」。街を歩き、白杖の感覚や手触り、おしゃべりを頼りに制作した。



社会のダイバーシティを考える

6つの点から広がる世界

点字にふれる

〔会期〕2024年7月26日～10月24日

日本には、視覚障害者が27万人、1000人に2人ほどいるといわれる。全盲の人、見えにくい人、一人ひとりに違った見え方があり、暮らしを支える工夫もさまざまだ。「点字」をテーマに「触覚」の世界をたどる本展は、いずれも視覚障害のある、美術家の光島貴之氏、美術鑑賞者で写真家の白鳥建二氏、「てんやく絵本」を生んだ岩田美津子氏の協力を得た。障害の有無にかかわらず、世界の捉え方は人の数だけあり、その違いを確かめ合うことで、この社会には、いまよりも奥深い「つながり」が生まれていくのかもしれない。



岩田氏（右）のトークショー「見えなくたって、絵本を読みたい!」。聞き手は、ともに絵本を制作した、元こぐま社編集長の関谷裕子氏。

6 | アートとデザインをひもとけば



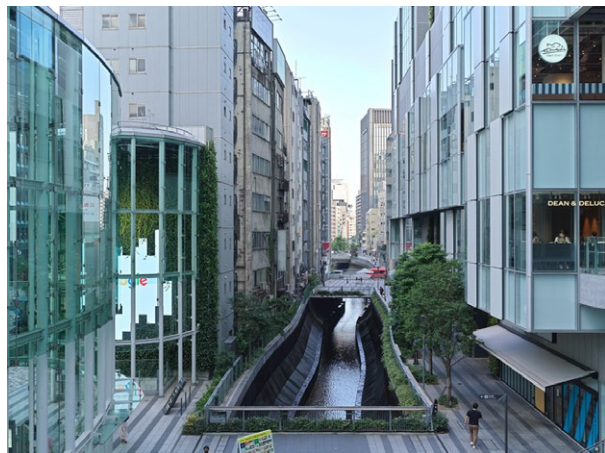
石川直樹 STREETS ARE MINE

[会期] 2021年12月10日 - 2022年2月17日

写真家・石川直樹は、極地から都市に至るまで、世界中でフィールドワークをくり返しながら撮影を続けてきた。2020年、新型コロナウイルスの蔓延によって移動が制限される中、石川の眼差しは生地でもある東京の街に向けられる。本展では、20年初頭から21年夏にかけて都内で撮影された作品を紹介した。その一つが、緊急事態宣言後に人影が減った渋谷の街を、わがもの顔で走るネズミ。石川はこれをレンズ付きフィルムで撮った。写真家が捉えた「空虚な街」の2年間は、未曾有の時代そのものの記録として刻まれた。



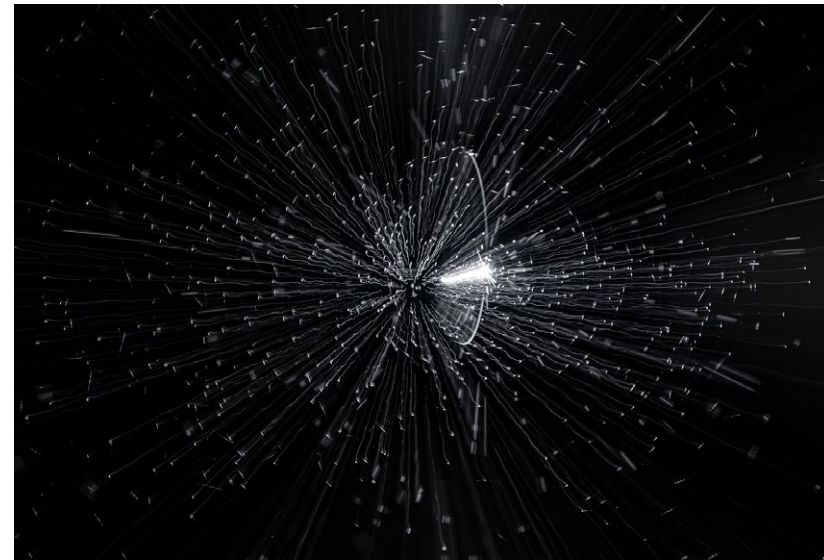
東京・渋谷：2020年7月



東京・渋谷：2020年8月



東京・渋谷：2020年6月



「深い森」を意味する「Myrkviðr (ミュルクヴィズ)」。見る位置によって、まったく違う世界が見える。



「Myrkviðr」は、テグス糸とLEDで作られている。光源がゆっくりと旋回し、無数の光も生きもののように動いていく。



松本PARCOで2021年に展示された「Brocken 5」。自然光を素材にしたこの作品が、本展のきっかけとなった。



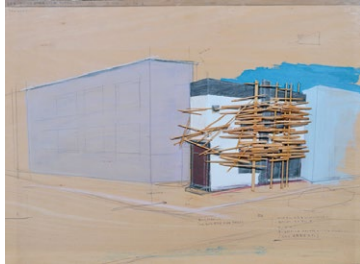
千田泰広— 視野の外は何色か？

[会期] 2022年3月3日 - 5月26日

世界的なライトアーティストとして知られる千田泰広は、「空間の知覚」と「体性感覚の変容」を主題にインスタレーション作品を制作してきた。本展のタイトル「視野の外は何色か？」は、千田が子どもの頃に抱いた疑問からつけられている。人は自分の見るものが現実だと錯覚しやすいが、それはいつも同じ目と脳を使って世界を検知しているからであり、あくまでも、ただ一つのセンサーが見せるものに過ぎない。「世界が無限に存在していることを忘れず、人の領域を拡げていきたい」。そんな思いが、本展の作品を生み出した。



ギャラリー エークウッドのある竹中工務店東京本店のエンタランスに、「TETRA-HOUSE 326 PROJECT」を再制作した。



上・会場の入り口にも「TETRA-HOUSE 326 PROJECT」を制作。下・「TETRA-HOUSE プラン・ドローイング」。(個人蔵)

デザインの仮説と仮設 廣村正彰+

〔会期〕2025年7月11日～10月16日

廣村正彰は、1988年に田中一光デザイン室から独立して以来、グラフィックデザインを軸に、さまざまな分野のアートディレクションやサイン計画などを手掛けてきた。そのサインデザインは、横須賀美術館の「よこすかくん」のように、建築空間の意図に寄り添いながら、見る人に「共感」を抱かせて導くものが多く見られる。「デザインは『仮説』に基づいていると同時に、『仮設』的なものである」。本展では、そんな廣村の発想を紐解く実験的な作品「Study」と、仕事の実例「Project」を、5つのテーマの章立てで紹介した。



「よこすかくん」は、設置後しばらく経って自然についた愛称。コロナ禍の時期は、ソーシャルディスタンスを呼びかけた。文字を使わずに、誰にでも意味を伝えられるサイン。



川俣正 「アパートメント・プロジェクト」1982-86 ドキュメント展 ～TETRA-HOUSEを中心に～

〔会期〕2023年7月7日～9月7日

「TETRA-HOUSE 326 PROJECT」とは、1983年に川俣正が制作したインスタレーション作品である。札幌市北3条西26丁目の一軒家を借りて、室内外に木の廃材を張り巡らしたこの作品は、川俣の「ワークインプログレス（工事中）」というスタイルを方向づけたプロジェクトの一つ。普通の生活空間を作品化し、普通の生活者と出会うような場を設定する。当時それは画期的であり、プロジェクト実行委員会の有志による運営形式だったことも斬新だった。本展は、TETRA-HOUSE から40周年を迎えるにあたり、前後のアパートメント・プロジェクトを総括したドキュメント展である。



「TETRA-HOUSE 326 PROJECT」の制作風景。川俣が道路から指示を出す。



1章「記憶と痕跡」のStudyより。三菱鉛筆の工場の門塀に、鉛筆の看板を設けた。鉛筆にまつわる懐かしい記憶が呼び覚まされる。

2章「字と美」のStudyより。竹に文字をくくりつけ、俳句を浮かべた写真は、あたかも絵巻物のようだ。「文字と絵（風景）を同時に脳が取り込むと、日本人の感性に響くのではないか」という実験。

20周年に寄せて

小さな港から大海へ

酒井忠康

元世田谷美術館館長



エー クワッドについて語ろうとすると、どうしてもわたしには美術館時代の体験と重ねるところがある。しかし似たような施設だから、と大雑把にくくれば、思い浮かぶのは小さな港みたいな印象かな。

そこで働いている人間のこと、出船入船にかかわる種々雑多な業務のこと、ときには怪しい船も入ってきて慌てるが、そうなれば半端じゃないよね。でも、あの港へ寄ったお蔭で大いに癒されたし、忘れられない思い出になった——などと水夫や乗客に言われたら堪らない。まあ、時空間を超えた出会いがあり、よろこびを提供する場所とでも見なしたらいい。

いずれにせよ、無機的な場所ではない。人がそこへ足を運んで生じる出会いの体験が、稀には、人生における記憶の大切な風景となることだってあり得る。わたしはよく彫刻のことを「記憶の装置」と書いてきたが、ギャラリーというのは、そんな感じを抱かせる場所と称していい。英国の詩人・画家のW・ブレイクの言葉を借りると、芸術というのは、即ち人間が救済される場所なのだそうである。

いつも斬新で刺激的な展示をしてきたエー クワッドである。企画のなかには、一種キュレトリアル・マジックの効いた洒落た展覧会になっているものがあった。若いときには、これは見せるのが惜しいね——などと発言して叱られたが、老来、もの言いは穏やかになって、わたしはこう呟くだろう。他者の記憶に残されるものが大切なよ——と。

ギャラリーの人格

内藤 廣

建築家・東京大学名誉教授・多摩美術大学学長



©今井智己

20周年、おめでとうございます。

アルヴァ・アアルト、アイノ・アアルト、マリメッコなどの北欧文化の紹介、石元泰博さんや大野美代子さんの展示、どれも記憶に残っています。

なかでも特に印象に残っているのは、吉村順三の三里塚教会の展示です。展示を見るまではこの建物の存在を知りませんでした。ここには、歴史的なもの、政治的なもの、それと信仰が重ね合わせになった複雑な背景があります。それ故、長い間ジャーナリズムも触れずにいました。ギャラリーの展示としては最も扱いにくい対象のはずです。

いわば歴史の片隅に忘れ去られた簡素極まる小さな建物。若き日の吉村は、この建物に背景を超えた姿を与えた、ということを感じることができました。構築する意思、これこそが本来的な意味での「建築」なのだと思います。

A⁴は、時代が欠かしてはならない視点、決して忘れてはならない事柄、これだけは押さえておかないと、と思うコンテンツを提供し続けてこられたと思います。大切な事こそ声高にならずに控えめに伝えたい、常に見識を養って中庸を保つ、これには大変なエネルギーが要ります。20年もやってくると、この姿勢がA⁴に一つの人格を付与したように感じます。この姿勢を「良識」と呼んでもよいと思うのですが、それがA⁴が育て上げてきたギャラリーの人格になったのではないかと考えています。

つくる人、語る人

三宅理一

谷口吉郎・吉生記念 金沢建築館館長



日本の建築をグローバルに評価するにはさまざまな見方があります。伊勢や法隆寺に始まる歴史遺産やすぐれた建築家たちにリードされる現代建築をもって世界のトップランナーと位置付ける見方がある一方、他の先進国に比べてきわめて低い公共の文化予算、ランドデザインを欠いて再生産される雑然とした街並みなどから、ネガティブな見解も少なくありません。建築はそれをつくる人だけではなく、使う人、享受する人があって初めて成り立つもので、専門家だけではなく市民の中で広く価値観を共有することは大きな課題です。

日本の建築文化の特徴は、民間のイニシアティブが大きな意味をもつ点にあります。それを支える企業の貢献がコーポレート・アイデンティティの枠を超え、広く市民社会の中に入り込んでいる例が各地に見られます。ギャラリー エー クワッドの存在はその点にあり、長い時間をかけて紡いできた建築への幅広い知見は日本における建築文化の啓蒙に一石を投じるものといってよいでしょう。もともと「つくる人」であった企業が、「語る人」「交わる人」となって価値の創出だけでなく、その共有に大きな役割を果たしてきました。

20年という節目はひとつの世代に対応します。21世紀という時代のフロントランナーとして大きな蓄積を築いてきたことは大いに誇ってよいでしょう。4世紀にわたって日本の建築をつくり上げてきた日本の匠がこれから次の世代に対して何を発信するか、世界が注目しています。

20年前のエー クワッド

松本 透

石橋財団アーティゾン美術館副館長



ギャラリー エー クワッド開設20周年と聞いて思い出されるのは、わたしの場合、やはり竹中工務店・東京本社ビルの玄関前に立つ祐成政徳によるモニュメント彫刻《Canal》のことだ。

南北に延びるその新社屋は、脊髄部に光庭を配列した「光の運河」を擁し、掘割が縦横に走る水運地帯に立つ。祐成の彫刻は、ノコギリの形状を模したステンレス製の巨大な構造物だが、歯の先端をぐっと起こしたその姿は、波を切って進むゴンドラか何かのようでもある。

訪れるたびに楽しみなのは、玄関から外に出たときの眺めだった。《Canal》の無機的なグリッド構造—半透明の壁—を透かして、正面にはケヤキの樹列が壁のように立ち並んでおり、四季折々の深い緑や、絵具を散らしたような黄や、空気を切り裂く枝の鋭い斜線が、彫刻の格子模様と一体化し、共振しながら、一幅の絵のような景観を呈しているのだ。

あれから、なんともう、20年も経つのか—。

この20年間に開催されたエー クワッドのプログラムを見ると、建築というものが、わたしたちの生活（私的な、また社会的な）の万般に関わるものであることがとてもよく分かる。しかも雑誌の特集記事とは訳がちがう。ギャラリーであるからには、物を集めてきて、そのつど一個の具体的な空間をしつらえなければならない。息つく暇もなく、20年が過ぎたであろう。お疲れさまでした。

模型制作を通した名建築との 一期一会の出会いに感謝して

松隈 洋

神奈川大学教授・京都工芸繊維大学名誉教授



振り返ってみると、「ル・コルビュジエのインド」（2006年）から、「坂倉準三／前川國男／木造モダニズム」（2008年）、「聴竹居と藤井厚二」（2009年）、「札幌聖ミカエル教会とアントニン・レーモンド」（2010年）、「三里塚教会物語と吉村順三」（2013年）、「本のある風景」（2023年）、「建築家・吉村順三の眼」（同）まで、7度にわたり企画に協力する機会がありました。そんな中、何よりも建築展の意味を実感したのが、学生たちと現地調査を元に取り組んだ3つの木製模型の制作でした。

聴竹居は、高低差のある敷地全体の制作に苦労しましたが、展示をきっかけに注目が集まり、関係者と地元の人びとの尽力が実を結び、2017年に国の重要文化財指定を受けて、丁寧な修復が施されました。また、吉村順三の手がけた唯一の教会建築で、その存在が知られていなかった三里塚教会は、簡素で素朴なたたずまいを広く紹介でき、展覧会を通じて集まった寄付金による鐘の設置も印象的でした。そして、吉村が多喜子夫人と共に創設した子供たちの音楽教室ソルフェージュスクールは、継承者の息女の吉村隆子さんの案内で実測して模型を制作し、2025年の国の登録有形文化財指定へ至る経緯を見守ることができ、得がたい経験となりました。

こうした建築展を通して、建築は社会的共有財産であり、ギャラリーの活動が大きな意味を持つことも見えてきました。良い企画を続けていただきたいと思います。

印象に残る企画展より

和氣雅子

AWP代表



エー クワッド20周年にあたり、これまでの展覧会より、印象に残る2企画の思い出をたどってみました。

一つ目は、2007年6月開催の「クリスティアーネ・レーア展」。作品の素材は、植物の種や茎、綿毛や花、はたまた馬の毛などで、乾燥させたものを会場に持ち込み、展示するとのこと。素材の量とギャラリーのスペースを想像すると、楽しみよりも不安が勝りましたが、いざ開催してみれば、繊細で美しい素材で空間が見事に埋め尽くされ、これまでに経験のない素晴らしい展示に拍手しました。その美しさは、素材の持つ数学的な「法則や力、秩序」「建築構造や知能」など、レーアさんが時間をかけて培った探究心から完成されたことをのちに知り、納得しました。めでたし。

二つ目は、2019年10月開催の「藤元 明 陸の海ごみ」。作品の素材は、漂着した海ごみや、石油を原料とする海洋プラスチック等々。藤元さんは、長崎県五島列島と石川県能登半島で集めた大量のごみを東京に運び、まつわりついている異物を取り除き、巨大立体や壁面レリーフなどを創作しました。五島列島福江島で海ごみに取り組む高校生たちに、この絶望的な問題について藤元さんが尋ねると、彼らの答えは、「地元の海の問題ではなく、国際規模で取り組まないと解決しない。それでも、大人たちが汚した海を手の届くところからきれいにし、その振る舞いを広げることで未来に繋げたい」。アーティスト・藤元明の葛藤も胸に迫る展覧会でした。

ここちよい関係

加藤文俊

慶應義塾大学教授



はじまりは、東京駅だった。写真展「100人の東京駅」（2006年）のさいにお声がけいただいて、まずは保存・復原工事をひかえた東京駅の界限を歩いた。展示用のブックレットに短い文章を寄せ、さらにギャラリーの一角でちいさな展示をした。それから、数年間にわたって「100人の…」シリーズにかかわる機会をえた。浅草、東京タワー、築地、上野、深川。毎回、100人で撮った数千枚の写真でギャラリーが埋め尽くされるようにワクワクした。「決定的瞬間」を写した一枚の写真ではなく、おびたしい数の写真こそが、まちの理解をかたどってゆくことを学んだ。

思えば、建物やまちをつくったり直したりするには時間がかかる。なにより、その時間はつねに人びとの暮らしとともにある。変わることも、変わらないことも、ギャラリーは、いつでもそのようすを静かに見守っているのだ。あたらしい企画のたびに、あたらしい世界がつくられる。そのくり返しをとおして、まちが息づいていることを実感する。

ふり返ってみると、出会ったころは40代半ばだった。気づけばギャラリーは20周年を迎えることになり、ぼくは還暦をこえていた。出会いからいまで、つかず離れずのような関係がずっと続いている。このゆるやかなつながりが、じつはここちいい。いくつもの節目で、自分の仕事のしかたについて考えるきっかけになった。20周年をお祝いするとともに、感謝の気持ちを伝えたい。

建築文化とともに歩む未来

関谷哲也

ギャラリー エー クワッド理事長



ギャラリー エー クワッド20周年に際し、これまで支えてくださった皆さまに、心より深く御礼申し上げます。

本財団は、竹中工務店有志による、建築文化発信の場を持ちたいという原点に立ち、建築と文化と社会を結ぶユニークな空間を築いてきました。展覧会やイベント、シンポジウムや教育的プログラムなどの積み重ねは、建築とそれにまつわる暮らし・文化・芸術に関わる多様な問いを社会に投げかけ、「建築文化の力とは何か」、「より良い社会にどう近づくのか」、「人々が幸せになるには」に想いをめぐらすきっかけを与えてきました。また、価値の揺らぐこの難しい時代においても、公益財団法人の先達である竹中育英会や竹中大工道具館とともに、竹中工務店の経営理念の普遍性を示すことを誇りに思っています。

本記念の年は、これまでの歩みを振り返りつつ、次代への責務を確かめる良き機会です。次の20年も、私たちは独自の視点を持って新たな表現を探求し、若い世代や国内外の仲間と連携しながら知を共有して、人々と静かな対話を広げてまいります。建築文化の知と実践を社会資本の価値として見つめ直し、地域社会や国際社会の課題に応答しながら、人と社会をつなぐ架け橋となることを願っております。

今後も学びを続け、皆さまとご一緒に新たな発信にも取り組んでまいります。引き続き、末永いご指導とご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

2021-2025 アウトリーチ

巡回展をはじめ、当財団が企画協力・共催している活動をご紹介します。

2021

- **世田谷美術館**
AINO AND ALVAR AALTO Shared Visions
アイノとアルヴァ ニ人のアアルト
フィンランド ―建築・デザインの神話 [1]
2021.3.20-6.20
- **裏磐梯高原ホテル**
樹の一脚展 ―ひこばえを探しに行きませんか― [2]
2021.4.10-6.30
- **定禅寺ギャラリー**
中村征夫写真展 ―五色沼の魅力に迫る―
2021.5.11-6.25
- **兵庫県立美術館**
AINO AND ALVAR AALTO Shared Visions
アイノとアルヴァ ニ人のアアルト
フィンランド ―建築・デザインの神話 [3]
2021.7.10-8.29

2022

- **裏磐梯高原ホテル**
折り紙建築で巡る旅 ―茶谷正洋・亜矢の世界―
2022.1.12-3.31
- **裏磐梯高原ホテル**
木組みの家展
2022.7.15-9.30

2023

- **裏磐梯高原ホテル**
発酵と暮らし ―人も海も土も森も…すべてはつながっている―
2023.2.1-3.31
- **EQ House**
月で暮らそう、月で遊ぼう
重力1/6のワンダーランド展@EQ House [4]
2023.5.29-8.31
- **裏磐梯高原ホテル**
百の診療所よりも一本の用水路を 中村 哲の挑戦
2023.7.14-9.30

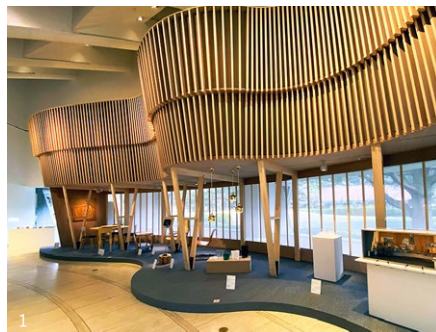
2024

- **裏磐梯高原ホテル**
本のある風景 公共図書館のこれから
2024.2.1-3.31
- **石川県立図書館**
発酵と暮らし ～石川の海・山・技～ [5]
2024.6.11-10.14
- **裏磐梯高原ホテル**
多田美波展 Lighting Sculpture
2024.7.5-9.30
- **URBAN PICNIC**
ビート・アウドルフのナチュラリスティックガーデン
―いのちがめぐる庭―
2024.10.5-11.4
- **御堂ビルディング 1階 竹中工務店 御堂筋とつながる共創の場**
ビート・アウドルフのナチュラリスティックガーデン
―いのちがめぐる庭―
2024.11.5-12.6

2025

- **裏磐梯高原ホテル**
ビート・アウドルフのナチュラリスティックガーデン
―いのちがめぐる庭―
2025.2.1-3.31
- **裏磐梯高原ホテル**
松岡享子からの贈り物 東京子ども図書館50年のあゆみ
2025.7.15-9.30

○裏磐梯高原ホテルライブラリーの選書・インテリアを、
2012年4月より現在まで担う。
「旅」をテーマに約2000冊を選書。[6]



2005－2020 展覧会

＊竹中大工道具館との連携企画

2005

- 祐成政徳「Another side of CANAL」(PRE EVENT)
2005.2.24－4.8
- TAKENAKA デザイン展 ―竹中工務店設計部の源流―
モダニズム 16 人展 (PRE EVENT)
2005.4.11－5.6
- TAKENAKA デザイン展 ―竹中工務店設計部の潮流―
10 のチームにみる方法論から (PRE EVENT)
2005.5.9－6.10
- AAF の NGO 活動展 ヒマラヤの学校建設 (PRE EVENT)
2005.7.4－7.29
- 大工を支えた工人達 左官とその道具 東京展＊ (PRE EVENT)
2005.8.8－9.9
- **GRAND OPENING 2005.9.16**
石元泰博写真展「都市への視線」
2005.9.16－11.11
- 石井 春「ポルトガルの風」
2005.11.16－12.26

2006

- 長倉威彦「The Unbuilt Monuments」
2006.1.16－2.28
- 北田英治写真展「ル・コルビュジェのインド」
2006.3.7－4.14
- 保存と再生 明治生命館 1934－2006
2006.4.21－6.9
- 大巻伸嗣「Liminal Air Descend 2006」
2006.6.21－8.11
- 木を生かす匠 木挽とその道具＊
2006.8.21－9.29
- 一人・建築・都市を記録する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の東京駅
2006.10.6－10.20

- 東京建築士会 第 6 回「住宅課題賞」入選作品展
2006.10.25－11.10
- 村井 修写真展「都市の記憶」
2006.11.17－12.26

2007

- 安田泰幸スケッチ紀行
1000 の街ものがたり展 一人は何をつくってきたか―
2007.1.15－2.20
- 延藤安弘コレクション 世界の住まいとまち絵本展
―「ちいさいうち」を覚えていますか―
2007.3.1－4.13
- 平田五郎展「月を盗んだワタリガラス」
2007.4.25－5.31
- クリスティアーネ・レーア展
2007.6.8－7.31
- 削る 一匏の世界＊
2007.8.6－9.21
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の浅草モダン
2007.9.28－10.19
- 東京建築士会 第 7 回「住宅課題賞」入選作品展
2007.10.24－11.9
- アルピニスト 野口健からのメッセージ展
―未来の子どもたちのために―
2007.11.14－12.26

2008

- 吉村行雄写真展 ストックホルム市庁舎 ―北欧の光と影―
2008.1.17－2.28
- 江口 週展 一間の作法―
2008.3.4－4.16
- 坂倉準三 / 前川國男 / 木造モダニズム展
―昭和初期の住宅に見るものづくりの記憶―
2008.4.22－6.3
- 増田彰久写真展 世界遺産 ―英国産業革命の精華―
2008.6.6－7.17
- リサ・ヴォート写真展 WHITE GIFT ―北極からの贈りもの―
2008.7.25－8.8
- 伐 一木を伐る技展―＊
2008.8.18－9.26

- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の東京タワー
2008.9.30－10.17
- 東京建築士会 第 8 回「住宅課題賞」入選作品展
2008.10.20－11.8
- ひびのこづえ展「2LDK 星 (せい)」
2008.11.14－12.25

2009

- 世界の建築スクール展 MIT from BOSTON
Design Teaching at MIT
2009.1.16－3.13
- 流 政之展 ―建築と彫刻―
2009.3.26－5.15
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の築地
2009.5.22－6.12
- 宇宙からの伝言 ―ものづくりと冒険の心― 的川泰宣展
2009.6.19－8.7
- 鋳 (かざり) ―建築装飾にみる金工技法―＊
2009.8.17－9.25
- ものづくりの心と技 三菱一号館 ―復元の記録―
2009.9.28－10.9
- 東京建築士会 第 9 回「住宅課題賞」入選作品展
2009.10.15－11.6
- 「聴竹居」と藤井厚二展 ―日本の気候風土に根ざした住宅の追求―
2009.11.11－12.24

2010

- 杉浦康益展 ―陶の佇まい―
2010.1.15－3.12
- GALLERY A⁴ ―5 年間の活動を振り返って―
併設展：ヒマラヤの学校建設その後
―AAF の NGO 活動展 vol.2―
2010.3.19－4.16
- 「札幌聖ミカエル教会」とアントニン・レーモンド展
―日本で発見した木造モダニズム―
2010.4.23－6.10
- 竹中大工道具館 開館 25 周年記念巡回展
棟梁 ―堂宮大工の世界―＊
2010.6.16－7.23

- 世界の建築スクール展 AA スクール
2010.7.30－9.24
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の上野
2010.9.29－10.19
- 東京建築士会 第 10 回「住宅課題賞」入選作品展
2010.10.25－11.5
- 森山開次展 ハコ・ヒト・ハコ ―踊り | 空間 | 映像―
2010.11.11－2011.1.7

2011

- 八木マリヨ展 縄の森をくぐりぬけると…
2011.1.14－3.10
- 八幡浜市立日土小学校と松村正恒展
―木造モダニズムの可能性―
2011.3.18－6.3
- 橋本典久の世界 虫めがね[∞] (と) 地球儀
2011.6.10－8.11
- 葺く 一草と木でつくる屋根―＊
2011.8.22－10.1
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の深川 (PRE 展示)
2011.10.4－10.13
- 東京建築士会 第 11 回「住宅課題賞」入選作品展
2011.10.17－11.4
- THOUGHT IN JAPAN ―700 通のエアメール―
瀬底 恒が結んだ世界と日本
2011.11.11－2012.1.19

2012

- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100 人の深川
2012.1.27－2.23
- 甦った西本願寺「伝道院」と伊東忠太展
―新しい日本の様式建築をめざして―
2012.3.2－4.26
- 世界の建築スクール展
ETH スイス連邦工科大学の建築教育
2012.5.11－6.28
- 中村征夫写真展 ―東京の海―
2012.7.5－8.9

- 数寄屋大工 ―美を創造する匠―＊
2012.8.20-9.29
- 東京建築士会 第12回「住宅課題賞」入選作品展
2012.10.9-11.9
- approach 200号記念展 1964-2012
2012.12.3-2013.1.31

2013

- BEYOND 3.11 南三陸
2013.2.7-2.28
- three is a magic number 6
2013.3.14-4.25
- 世界の建築スクール展 ハーバード大学デザイン大学院の紹介
2013.5.10-7.4
- トーヴェ・ヤンソンの夏の家
―ムーミン物語とクルーヴ島の暮らし―
2013.7.12-9.30
- 第13回 住宅課題賞2013 建築系大学住宅課題優秀作品展
2013.10.7-10.25
- 三里塚教会物語と吉村順三展
―時代を越えて生き続ける小さな木造教会―
2013.11.1-2014.1.23

2014

- エバレット・ブラウンの湿板光画で辿る旅
日本の面影 ―Echoes of Tradition―
2014.1.30-3.31
- 南三陸の今を記憶する 2014.01.01-2014.03.11
2014.4.10-4.24
- 辻 けい展 2014 Red like the spring water
―あかからあかへ。あるいは火と水―
2014.5.9-6.27
- 絵本づくりのマイスター3人展
―西巻茅子・馬場のぼる・わかやまけん―
2014.7.4-9.4
- 竹中大工道具館30周年記念巡回展 日中韓 棟梁の技と心＊
2014.9.11-10.24
- 第14回 住宅課題賞2014 建築系大学住宅課題優秀作品展
2014.11.4-11.21
- 小さなホールの物語 ―高野悦子のシネマライフ―
2014.12.1-2015.2.5

2015

- GALLERY A⁴ ―10年間の活動を振り返って―
併設展：ヒマラヤの学校建設15年の軌跡
―AAFのNGO活動展 vol.3―
2015.2.10-3.5
- シリーズ「都市に住まう」第1回
同潤会の16の試み ―近代日本の新しい住まいへの模索―
2015.3.20-5.21
- 世界の建築スクール展 WOOD PROGRAM
―AALTO UNIVERSITY, FINLAND―
2015.6.5-8.5
- 竹中大工道具館東京企画展 the SAKAN ―継承と革新―＊
2015.8.17-9.26
- Maggie's Centres ―生きる喜びを失わないこと―
2015.9.29-10.13
- 第15回 住宅課題賞2015 建築系大学住宅課題優秀作品展
2015.10.19-11.6
- First LEGO League で世界へ
―子どもの好奇心に灯をつけるスイッチ―
2015.11.13-2016.1.28

2016

- Eija Koski HIMMELI ―エイヤ・コスキ フィンランドの祈り―
2016.2.3-2.17
- 國府 理展「オマージュ 対峙温室」
2016.3.7-5.9
- 美の壺 放送10周年記念「美の壺」和モダン・暮らしと憧れ展
2016.5.25-7.29
- AINO AALTO (アイノ・アールト)
Architect and Designer ―Alvar Aalto と歩んだ25年―
2016.8.12-10.31
- 第16回 住宅課題賞2016 建築系大学住宅課題優秀作品展
2016.11.7-11.22
- 中村好文×横山浩司・奥田忠彦・金澤知之
建築家×家具職人 コラボレーション展 at the A⁴＊
2016.12.14-2017.2.25

2017

- 今森光彦写真展 ―琵琶湖の便り、里山からの贈り物―
2017.3.8-5.18

- ヴァージニア・リー・バートンのちいさいうち
―時代を超えて生き続けるメッセージ―
2017.6.1-8.9
- 竹中大工道具館企画展 千年の葺 (いらか) ―古代瓦を葺く―＊
2017.8.21-10.6
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100人の日本橋
2017.10.13-11.9
- 第17回 住宅課題賞2017 建築系大学住宅課題優秀作品展
2017.11.21-11.29
- Marimekko Spirit
―Elämäntapa (エラマンタパ) マリメッコの暮らしぶり―
2017.12.15-2018.2.28

2018

- BRIDGE ―大野美代子の人と人、街と町を繋ぐデザイン―
2018.3.9-4.25
- 生まれてはじめてもらうプレゼント
フィンランドのベビーパッケージ
2018.5.11-8.3
- 竹中大工道具館企画展 南の島の家づくり
―東南アジア島嶼(とうしょ)部の建築と生活―＊
2018.8.20-9.28
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100人の本郷
2018.10.5-10.29
- 第18回 住宅課題賞2018 建築系大学住宅課題優秀作品展
2018.11.2-11.20
- 木下直之全集 ―近くても遠い場所へ―
2018.12.7-2019.2.28

2019

- イームズハウス：より良い暮らしを実現するデザイン
2019.3.19-5.30
- GWに東京のまちを撮ろう！ 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100+20人の東京 2019-2020
～North編～
2019.6.21-7.25
- 竹中大工道具館企画展 木工藝 清雅を標に
―人間国宝 須田賢司の仕事―＊
2019.8.2-9.20

- 藤元 明「陸の海ごみ」
2019.10.4-11.14
- 第19回 住宅課題賞2019 建築系大学住宅課題優秀作品展
2019.11.20-12.2
- AINO AND ALVAR AALTO Shared Visions
アイノとアルヴァ 二人のアールト
建築・デザイン・生活革命
Small is beautiful - ideal homes for everyone
小さな暮らしを考える
2019.12.20-2020.2.27

2020

- マギーズセンターの建築と庭 ―本来の自分を取り戻す居場所―
2020.6.2-6.25
- 一人・建築・都市を記憶する―
レンズ付フィルムによる写真展 100+20人の東京 2019-2020
～South編～
2020.7.9-9.17
- 竹中大工道具館企画展
フィリップ・ワイズベッカーが見た日本
大工道具、たてもの、日常品＊
2020.10.2-11.20
- 第20回 住宅課題賞2020 建築系大学住宅課題優秀作品展
2020.12.3-12.10
- GALLERY A⁴ 15年 ―その先へ―
2020.12.18-2021.1.29

GALLERY A⁴ の歩み

- **2002年**
12月 ギャラリー分科会発足。東陽町への本社移転決定を受け、文化情報発信拠点として新設するギャラリーの場所、規模、目的等の検討に入る。
- **2003年**
12月18日 ギャラリー設置承認。分科会により社外ヒアリングなどをベースに事業計画、予算計画、今後の課題を検討・報告。
- **2004年**
5月15日 館長に川北英が決定。社内公募により、専任スタッフ1名、兼任スタッフ4名決定。
7月28日 企画部会キックオフ。ギャラリーコンセプトについて喧々諤々の議論を行い、歴史的建築、建築写真、現代アートの3本柱のほか、竹中大工道具館展の定期開催を決定。
8月10日 企画部会においてギャラリーアドヴァイザーのリストアップ。社内承認される。
9月5日 企画部会においてギャラリー名称の検討・決定・承認
10月15日 ロゴデザインの国際指名コンペ実施
11月30日 コンペ公募開始（～12月20日）
- **2005年**
1月 竹中工務店東京新本社ビルオープン（東京セントラルビル）
2月 コンペ審査・ロゴデザイン決定。審査委員長は宮崎桂。ドイツ・イギリス・イタリア・アメリカのデザイナー6名14案の中から、マイケル・マクギン案（在ニューヨーク）に決定。
2月24日 ギャラリー エー クワッド プレオープン。プレイベントの第1回は祐成政徳展。
9月16日 **ギャラリー エー クワッド グランドオープン**。石元泰博写真展。
- **2006年**
4月 「保存と再生」シリーズがスタート
10月 参加型企画「100 人の撮影会」シリーズがスタート
10月 住宅課題賞入選作品展。以降、毎年開催。
- **2008年**
4月 「木造モダニズム」シリーズがスタート
- **2009年**
1月 「世界の建築スクール」シリーズがスタート

- **2011年**
12月 一般財団法人設立
- **2013年**
3月 公益財団法人認定
7月 トーヴェ・ヤンソンの夏の家展。「夏の家」実寸模型は各地へ巡回。以降、フィンランドの文化や社会に学ぶ展覧会が増えていく。
- **2014年**
10月 メセナアワード 2014 メセナ大賞受賞
- **2016年**
4月 川北英館長が退任、白川裕信が新館長に就任
- **2017年**
6月 ヴァージニア・リー・バー튼のちいさいおうち展開催、全国へ巡回（～2018）。アメリカへの凱旋巡回展と「ちいさいおうち」模型の寄贈（2018～2019）。
12月 Marimekko Spirit 展開催、全国へ巡回（～2019）
- **2019年**
12月 アイノとアルヴァ 二人のアアルト展開催、全国へ巡回（～2021）
- **2020年**
2～5月 コロナ禍の緊急事態宣言を受けて臨時休館。イベント等の動画配信を開始。
- **2021年**
8月 西洋美術振興財団賞受賞（アイノとアルヴァ 二人のアアルト展のコンセプト立案と実現）
6月 「社会のダイバーシティを考える」シリーズがスタート
- **2022年**
10月 メセナアワード 2022 優秀賞受賞
- **2023年**
4月 岡部三知代副館長 / 主任学芸員が新館長に就任
- **2024年**
4月 日本建築学会賞（業績）受賞
- **2025年**
4月 令和7年度科学技術分野の文部科学大臣表彰「科学技術賞 / 理解増進部門」受賞

GALLERY A⁴ 20年の歩み

2025年11月14日 [金] - 12月4日 [木]

主催 / 企画 後援	公益財団法人 ギャラリー エー クワッド 江東区、一般社団法人 東京建築士会、公益社団法人 企業メセナ協議会、 フィンランドセンター	
協力	S2株式会社	
映像制作 会場グラフィック	らくだスタジオ 秋山和生 (kabastudios / east)	
パンフレット	編集 北川史織 デザイン 三浦樹人 印刷 望月印刷株式会社	
写真・絵	市川靖史 Per Olov Jansson 光鷲昇馬	2頁左上、19頁右下 2頁右上 2頁左中・左下・右下、9頁3・4、 10頁1・2・3、13頁1・2・3、17 頁、18頁、23頁右上・右中・右下、 24頁、25頁右上・右下、26頁右下、 27頁、28頁右上、30頁右上、31頁、 41頁4 2頁右中 6頁、14頁、15頁 9頁2 9頁5、10頁5・6、40頁3 10頁4 13頁4 13頁5 19頁左上 20頁 21頁右下 22頁 23頁左上 25頁左上 25頁右中 26頁左上、41頁5 26頁右上 28頁右中 28頁左下2点 28頁右下 29頁上 29頁右下 30頁右下・左下 32頁 33頁左上 33頁右下 34頁左上・右上 34頁右中 34頁右下 35頁右上 35頁右中・右下・左下 40頁1 40頁2 41頁6
	©Vlinderhof ただ 加藤文俊 古川泰造 Per Olov Jansson, 1970 表 恒匡 Eino Mäkinen, 1937 The Museum of Modern Art, New York / Scala, Florence ©Shigeo Ogawa 南 健二 PMS / ベシャワール会 (提供) 東京子ども図書館 (提供) 寺澤太郎 らくだスタジオ 石川県立図書館 (提供) 岡部三知代 松尾由佳 / Nica ©まほろばスタジオ 正田智樹 ©Five Seasons Media LLC, 2024 ©Piet Oudolf 越智貴雄 / カンバラプレス 石川直樹 山上洋平 ©Toru Tsuji 金川晋吾 辻 耕 曾我恵介 廣村デザイン事務所 大井川茂兵衛 / Hi-Bush 上野則宏 裏磐梯高原ホテル (提供) 吉村行雄	

GALLERY A⁴

公益財団法人 ギャラリー エー クワッド

館長	岡部三知代	
	山口朗徹 真鍋頼子 徳平 京 深澤悠里亜 風富嘉津美 西田千秋 北原英雄	
	川北 英 (2005.2 - 2016.3 館長) 白川裕信 (2016.4 - 2023.3 館長) 大山重俊 (2011.12 - 2016.3 事務局長) 石井康友 (2016.4 - 2025.3 事務局長、2025.4 - 参与) 山口広嗣 (2005.2 - 2016.3) 松隈 章 (2005.2 - 2019.3) 古宇田尚子 (2005.2 - 2016.3) 芦澤ゆり子 (2005.2 - 2011.3)	
評議員	木下直之 加藤文俊 田中隆吉	
	門川清行 (2005.2 - 2019.3) 長谷川晴一 (2005.2 - 2024.5)	
理事長	関谷哲也	
理事	酒井忠康 三宅理一	
	鈴木博之 (2005.2 - 2014.2) 内藤 廣 (2014.3 - 2020.2) 山下順弘 (2005.2 - 2019.3 理事長、2019.3 - 顧問) 重田正年 (2019.4 - 2023.3 理事長)	
監事	竹内陽一 吉見彰夫	
	寺田良夫 (2005.2 - 2024.3)	
展示専門委員会	酒井忠康 木下直之 和氣雅子 松本 透 松隈 洋 岡部三知代	
アドヴァイザー	酒井忠康 木下直之 和氣雅子	

公益財団法人 ギャラリー エー クワッド
136-0075 東京都江東区新砂 1-1-1 竹中工務店東京本店 1F
Tel: 03-6660-6011 Fax: 03-6660-6097



公式HP
https://www.a-quad.jp



THIS IS
MECENAT
2025